

高知で服飾作家に転身

東日本
大震災
5年

東日本大震災から11日で5年。松井浩子さん(54)は福島県郡山市の家族を離れて単身高知市に避難したのを機に服飾作家となり、新天地で第二の人生を切り開いている。「高知のおかげで新しいビジョンが見えてきました。福島被害はあまりにも大きかったけど、一人一人が『個』の復興を果たす力になりたい」と意気込む。【錦織祐一】

福島・郡山から移住 松井浩子さん

新天地での挑戦「個」の復興に

松井さんは神戸市長田区出身で、日本獣医畜産大時代に知り合った福島県出身の夫(53)と結婚し、郡山に移住。1男1女に恵まれた。阪神大震災(1995年)では「伯母は山の手で被害はありませんでしたが、私は一面燃え上がる新長田の街をテレビで見ました」。2011年3月10日、福島県立医科大の看護学生だった長女・詩歩さん(25)が宮城県内で車で自損事故を起こしたため、長男・淳喜さん(27)は友人らと翌11日に釣りに行く予定を取りやめて事故車を取りに行っていた。「あの事故がなかったら、十数人が津波で死亡していました」

東京電力福島第一原発事



高知オーガニックマーケットに出展する松井浩子さん。
「高知のおかげで新しいビジョンが見えてきました」
＝高知市池の泉立池公園で

故で、夫と詩歩さんは激務。避難区域より高いにのみ込まれた。「家の庭で放射能を測ったら1.48」と言われる。もう何も

信用できませんでした。限も」。出身。遠い親戚がいる高知への避難を思い立ち、詩歩さん「私たちが大丈夫だから、お母さんの好きにしたいよ」と背中を押してくれた。

13年4月、「まるで別世界の」高知市に移住。母の影響で「生活の二部」だった裁縫を生かし、リネン(麻)やオーガニックコットン(有機栽培の綿)など天然素材を生かした天然服工房「プチ・プラム」を開いた。天然素材にこだわったのは「力のある素材は服作りに重要だし、土に負れない。永久に土に負れないごみを出し続ける原発に、潜在的な抵抗があったのか」

5月には入野海岸(黒潮町の「Tシャツアート展」に詩歩さんと出展する松井さん。「高知では毎年新しいことに挑戦できる。東北には手仕事の伝統が脈々とあり、高知とつながり新しい文化をつくりたいですね」